

子規俳論における月並調

中嶋 秀和

要旨

「天保以後の句は概ね卑俗陳腐にして見るに堪へず。稱して月並調といふ。」と子規は「俳諧大要」に書いていて、これはよく知られたことばでもあるわけだが、子規御本人の月並調理解には、どうも、いま一つわかりきらないところがある。ことに、具體例にはいると、まことに曖昧模糊たるものになってしまっているのである。(中略||中嶋) どうも、子規自身もいうように、こうした評語は、多分に直観的なもので、それほどの内容規定を用意していたものとはおもえないのである。そして、その直観の働きに、一種の底意のようなものが感じられてならない。だからときに、直観に感情のかげりさえみえて、讀むほうも素直に讀めなくなる。

(『明治文學全集』第53巻附録月報83)

前述の文章は、金子兜太氏によるものである。この文章にもあるように、月並調について、確かに「いま一つわかりきらないところがある」ことは事実であると思う。また「それほどの内容規定を用意していたものとはおもえない」

としてゐることに同感である。私も、子規が月並という語を使い始めた初期の頃は、内容規定など用意してゐなかつたと思う。しかし、それはあくまで初期の頃はと限定されるものであり、時間の経過とともに徐々にではあるが、内容が形成されていったと考へる。

余は私に之を稱して月並流といふ

(『頼祭書屋俳話』)

もと月並調といふ語は一時便宜のため用ゐし語にて、理窟の上より割り出したる語にあらねば其意義甚だ複雑にして且つ曖昧なり

(『墨汁一滴』)

こういつた子規の言葉からも、当初は内容規定が用意されていなかったと推測できる。

子規の月並調理解は、子規文学観の形成をもつて出発したとすることができる。

俳句は文學の一部なり文學は美術の一部なり故に美の標準は文學の標準なり文學の標準は俳句の標準なり即ち繪畫も彫刻も音楽も演劇も詩歌小説も皆同一の標準を以て論評し得べし

(『俳諧大要』)

子規にとつて俳句とは文學の一部であり、文學もまた美術の一部なのである。明治二十四年に着手した「俳句分類」の仕事から、俳句が近代文學の一ジャンルとして自立できる可能性を、子規は見出してゐたに違ひない。しかし、その俳句の近代文學としての自立を妨げる要因に、芭蕉の存在と、月次句合の興行形態があつたのである。子規の俳句革新は、ここから出発する。

芭蕉忌や芭蕉に媚びる人いやし

芭蕉忌や我に派もなく伝もなし

子規が明治三十一年に作った句である。子規の芭蕉に対する姿勢がよく表現されている句であると思う。当時、*芭蕉以後の俳諧史において、わずかの例外を除けば、芭蕉は継承されることが当たり前であった。(山下一海)とあるように、芭蕉は批判されない、批判してはいけない存在であった。「我は其人を尊敬せずして其著作を尊敬する」(『俳句問答』)子規にとって、芭蕉の系統や流派だけを重んじる当時の風潮は、子規の大学観からしたら、決して認めることのできないものであったに違いない。子規が俳句革新を行っていく上で、明治二十六年という比較的早い時期に、『芭蕉雑談』において芭蕉の再評価をしていることから、子規の内面に占める芭蕉の存在の大きさを伺い知ることができる。

月次句合の興行形態もまた、子規の文学観に反するものであった。

月次句合 毎月、日を限って点者の出題に対する発句を募集し、定例日に開巻、入選句を返草に印刷し返送する俳諧の催し。当初、社中の練成を目的に宝暦期(一七五一〜六四)に始まったのが、のち一般投句者を対象に、高点句には景品を添えるなど営利的催しに変わった。(『俳文学大辞典』)

ここでの問題点は何か。それは俳句が「営利的催し」の手段として用いられていたことであろう。高点をもらい景品を得る。景品を得るために俳句を作る。営利的な目的のために作られた俳句は、子規にとっては、決して文学ではないのである。こうして子規は、俳句自体の価値判断からではなく、月次句合という「営利的催し」の批判のために、

月並調という語を用いるようになったのだと思う。したがって、当初は月次句合に投句される俳句を総称して月並調としただけで、「宮利的催し」の批判という以外に、「それほどの内容規定を用意して」いなかったのではないかと思う。

月並調の内容が形成されるようになったのは、明治二十八年『俳諧大要』を発表した頃からである。翌明治二十九年の『俳句問答』の内容が『俳文学大辞典』に「(一)感情に訴えず智識に訴える、(二)意匠の陳腐を好み新奇を銜う、(三)言語の懶弛を好み緊密を嫌う、(四)使い馴れた狭い範囲の語を用いる、(五)俳諧の系統と流派を光榮とする」と五つ要約されて出てくる。この五つと、『俳諧大要』の内容とを対照させて見ていくことにより、月並調の内容が明らかになってくるのである。しかし具体的な説明が乏しいことや、その説明の展開が整然としていないことなどから、月並調の説明がどうしても理解しにくく感じてしまうことは事実である。

子規以外の視点から月並調を見てみるとどうであろうか。その中でも特に、虚子と碧梧桐の二人に注目して、その視点から見てみることにする。

虚子は「俗悪、小細工、破廉恥」などという言葉を用いて月並調を説明している。そして彼の月並調解釈は、不易流行の流行に重きを置く→軽み→俗化→月並調となる、といった図式で表すことができる。また、碧梧桐は「具象、抽象、假設構想」などという言葉を用いて月並調を説明している。

月並という語の一般的な広がりについて、虚子は漱石の存在を指摘している。漱石が子規の死後発表した『吾輩は

猫である』の作品中に、たびたび「月並」という語が登場している。その使われ方がまさに「低俗・陳腐」といった意味で使われているのである。漱石によって月並の意味が、「低俗・陳腐」と固定されてしまったと言っても過言ではあるまい。

子規俳論における月並調をしっかりと理解し、ただ闇雲に低俗、陳腐として排斥されてきた月次句合の句や、蒼虬や梅室の句などをもう一度きちんと再評価するべきではないだろうか。

※ 國文學

解釈と教材の研究 俳句 創作・鑑賞 ハンドブック 第29巻16号臨時増刊